2021年01月25日

博士学位審査　論文審査報告書（課程内）

大学名　早稲田大学
研究科名　大学院人間科学研究科
申請者氏名　塚本　恵里香
学位の種類　博士（人間科学）
論文題目（和文）　高齢者介護施設における介護職員の思考の構造と健康状態･職場満足度の分析―感情労働に焦点をあてて―
論文題目（英文）　The Analysis of Thinking Structure, Health Status and Workplace Satisfaction of Care Workers in Elderly Care Facilities:Focusing on the Emotional Labor

公開審査会
実施年月日・時間　2020年12月11日・18:00-19:00
実施場所　ZOOMにて実施

論文審査委員

	所属・職位	氏名	学位（分野）	学位取得大学	専門分野
主査	早稲田大学・教授	小野　充一	博士（医学）	東京医科大学	臨床死生学
副査	早稲田大学・教授	扇原　淳	博士（医学）	順天堂大学	公衆衛生学
副査	早稲田大学・准教授	大月　友	博士（臨床心理学）	広島国際大学	臨床心理学
副査	防衛医科大学・准教授	大園　康文	博士（医学）	順天堂大学	地域看護学

論文審査委員会は、塚本恵里香氏による博士学位論文「高齢者介護施設における介護職員の思考の構造と健康状態・職場満足度の分析―感情労働に焦点をあてて―」について公開審査会を開催し、以下の結論を得たので報告する。

公開審査会では、まず申請者から博士学位論文について30分間の発表があった。

1　公開審査会における質疑応答の概要

申請者の発表に引き続き、以下の質疑応答があった。

1.1　質問：大変丁寧にまとめられているが、まず、p.2の記載は少子高齢化の現状に関する数字だけが文章になっているため，省庁が出している図表を示したほうが論文全体の完成度が上がるのではないか？

回答：ご指摘の通り、修正します。

1.2　質問:介護の質の定義を、ドナペディアンモデルを基盤にして提示されているが，介護の質の構造をきちんと捉えた記述を提示した方がよい。

回答：介護の質の定義に関して再検討し、本文と合わせて、タイトルを修正する。

1.3　質問：表1中の婚姻状況・同居家族は今回の思考の構造に影響を与えるものなの

か？著者の中で重要なポイントとしての認識から質問項目に入れたのであれば表中の記載だけでなく、本文中に記載する方がよい。また，介護経験年数は，業務としての年数か？表１と表3の記載方法を統一するべきだろう。

回答：表5において思考の構造に影響を及ぼすと仮定した属性について聞き取りを行った項目である旨を，本文中に加筆します。さらに、介護業務経験年数と修正し、表1.3の形式を統一します。

1.4　質問：研究 3 では被説明変数として身体的健康、精神的健康を上げ、説明変数は感情労働になっているが、研究 4 では双方向因果モデルになっており、この矢印の変化の理由が本文で読み取れない。研究３では重回帰を被説明変数ごとに分析をしているから，被説明変数も含めた全体のモデルがわからない状態のためと記述して、研究４ではモデルの確認をするために，探索的な検討を目的とした共分散構造分析を行ったと記載することが望ましい。

回答：ご指摘の内容を検討して、目的の部分に「探索的な検討を目的とした」旨を加筆することとします。

1.5　質問：表 6-8 に，カテゴリカルデータと量的データが同時に入っている点について説明して欲しい。

回答：介護職員の健康状態や職場満足度が，職員の性別，婚姻状況，職種などに関連していることが既存研究で確認されており、介護・看護分野の研究では、カテゴリカルデータも含めて分析をしていることが多い。このため，カテゴリカルデータを含め，ダミー変数化して分析した旨を加筆します。

2　公開審査会で出された修正要求の概要

2.1　博士学位論文に対して、以下の修正要求が出された。

2.1.1介護の質をテーマにするなら，介護の質に関するレビューをもう少し増やす必要があるが，論文全体としてぼやけてしまう印象がある。各研究論文の内容の軸を明確にし，今回の研究結果に絞る方が良い。

2.1.2p.27図2の結果図から思考の循環が読み取れない。ワークライーフバランスの図の示し方の工夫を行うことが必要。

2.2　修正要求の各項目について、本論文最終版では以下の通りの修正が施され、修正要求を満たしていると判断された。

2.2.1タイトルを「高齢者介護施設における介護職員の思考の構造と健康状態・職場満足度の分析―感情労働に焦点をあてて―」に変更し，本文の各章における記述も、現場における感情労働の構造や受け止められ方にフォーカスした記述に修正した。

2.2.2p.27図2を、適切に修正した。

3　研究科運営委員会委員からの問い合わせに対する返答

3.1　博士学位論文、審査報告書に対して、以下の修正要求が出された。

3.1.1従属変数に対しては独立変数、説明変数に対しては被説明変数の組み合わせ

で使用するべきである。

3.1.2回答；本論文の表記を，説明変数・被説明変数の組み合わせで修正します。

3.1.3M-GTAについて、ワークシートの例や定義について提示する必要がある。

3.1.4回答；分析ワークシートの例と，定義の一覧表を本論文に追加します。

4　本論文の評価

4.1　本論文の研究目的の明確性・妥当性：本論文は介護業務に向き合う介護職員の思考の構造および健康状態・職場満足度と感情労働との関係要因を明らかにすることを研究目的として、以下のリサーチクエスチョンを立てている。①介護職員が介護業務に向き合う思考の構造と感情労働の関連を明らかにする。②介護職員の健康状態・職場満足度と感情労働の関係要因を明らかにする。この設定は、介護労働の臨床現場における新たな介護労働の在り方についての研究として妥当性があると評価できる。

4.2　本論文の方法論（研究計画・分析方法等）の明確性・妥当性：本論文は、研究計画として、4 研究で本論文を構成した。介護職員の介護業務における思考の構造（研究 1），管理者の介護の質向上に対する思考の構造（研究 2）によって、介護業務における介護職員と管理者の思考を構成する要因とその構造を質的に明らかにし、分析はともに Modified Grounded Theory Approach（M-GTA）を採用している。さらに、介護職員の健康状態と職場満足度の関連要因の検討（研究 3）、介護職員の健康状態・職場満足度と感情労働の構造の検討（研究 4）では、通所介護事業所で働く介護業務従事者に対して調査票調査を行った。分析手法は研究 3 では、スピアマンの順位相関分析、ピアソンの積率相関分析、重回帰分析を行い、研究４では、感情労働・健康状態・職場満足度の構成概念の関連を共分散構造分析によって解析した。以上より、研究目的に応じた質的調査と量的調査を複合的に用いており、妥当な対象および研究方法の選定だったと言える。

なお、本論文で実施した実験の手続きについては、早稲田大学「人を対象とする研究に関する倫理委員会」の承認を取得し（研究１：2012-015、研究３；2012-015、研究 4；2012-015）、実験の前には参加者に対して実験内容についての十分な説明を行い、インフォームドコンセントが得られた上で実施したとしており、倫理的な配慮が十分になされていると評価した。

4.3　本論文の成果の明確性・妥当性：本論文では、介護職員の思考の構造として，感情労働の思考プロセスが内在することや、仕事とプライベートの調和が保たれた【介護の基盤】が維持されることを重視していることが明らかにされた。また、介護業務の在り方をミクロな視点から考えるうえで、「介護労働における感情の意味」について論考がなされており、本論文の明確な成果として特徴づけることが出来る。

4.4　本論文の独創性・新規性：本論文は、以下の点において独創的である。

4.4.1本論文は、介護労働が過重で慢性的な人材力不足が存在するという課題について、労働の質に焦点を当てて、介護労働の質改善に結び付けるための現状を分析した

調査研究という点において、著者でなければできなかった大きな独創性が認められる。

4.4.2 特に、介護の臨床現場を介護者と管理者の両方の視点を経験した筆者が、その両方の思考の構造について「感情労働」に焦点を当て分析した結果として、管理者と介護職員が認識するモチベーションの一部に一致する点があることを明らかにしたことは、独創的な研究成果のひとつと言える。

4.5　本論文の学術的意義・社会的意義：本論文は以下の点において学術的・社会的意義がある。

4.5.1 介護福祉学研究に対する意義として、本論文は介護職員の思考の構造にみる感情労働のプロセスに関する資料を提供し、介護現場における労働のあり方についての研究を蓄積するための学術的基盤の構築について、パイロット的役割を果たしていると評価できる。

4.5.2 介護福祉行政に対する意義として，介護保険制度下において各事業所が行う業務の分析や評価を行うツールとして、介護職員の思考の構造や感情労働への着目が欠かせないことを指摘した本論文の意義は高い。

4.6　本論文の人間科学に対する貢献：本論文は、以下の点において、人間科学に対する貢献がある。

4.6.1 本研究の知見から，介護職以外の対人援助職においても、多様な対人サービスの領域で支援業務における感情労働の有用性を研究する意味が示唆された。このため、対人支援業務において、労働者および管理者の双方の視点で、感情をキーワードにした研究の有益性が認識される可能性が高い。

4.7　不適切な引用の有無について：本論文について類似度を確認したうえで精査したところ、不適切な引用はないと判断した。

5　学位論文申請要件を満たす業績（予備審査で認められた業績）および本論文の内容（一部を含む）が掲載された主な学術論文・業績は、以下のとおりである。

・Erika Tsukamoto, Takeru Abe and Michikazu Ono：2015 Inverse roles of emotional labour on health and job satisfaction among long-term care workers in Japan , Psychology, Health & Medicine, Volume 20, 814-823 （査読有）

・塚本恵里香，大園康文，小野充一 ：2021 通所介護事業所における介護職員の感情労働と健康状態および職場満足度との関連，人間科学研究，第 33 巻/第 2 号・第 34 巻/第 1 号 補遺号 合併号（印刷中）（査読有）

6　結論

以上に鑑みて，申請者は，博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと認める.

以上